

【主題】 「わたし」が描きたい未来や地域社会「夢」の実現を目指して

【副題】 地域と連携した「アクション型探究」の実践

【学校・団体名】 宮城県角田高等学校

【役職名・氏名】 校長 井上 健一

1 はじめに

本校は、令和5年度に宮城県教育委員会より「学校運営協議会パイロット校事業」の指定を受け、本県内の高等学校としては4校目の「コミュニティ・スクール」となった。本校のスクール・ミッションである「地域からの期待に応え、積極的に地域の問題に取り組み、地域に貢献できる人材を育成すること」や「地域イベントへの参加によって積極的に地域と関わるなど、地域と連携しながら地域の問題に関わりつつ生徒自身の成長を地域と共に育んでいくこと」の実現を目指している。また、本校は、令和3年度より角田市生涯学習課及び認定NPO法人カタリバと連携し、総合的な探究の時間「角高夢 Project」（通称「夢プロ」、以下「角高夢 Project」と呼ぶ）を展開している。これにより、グラデュエーション・ポリシーで示している、以下の「理想とする角高生」とそれに対応した「本校で育てる6つの力」を育成したい。

—理想とする角高生

自ら志を抱く生徒、失敗を恐れず粘り強く続ける生徒、自らの考えを適切に表現できる生徒、地域を愛し関わる生徒、国際的な視野を持つ生徒、角田高校に誇りを持つ生徒

—本校で育てる6つの力

志す力、挑む力、伝える力、関わる力、認める力、創る力

本研究では、「アクション型探究」を定義し、「角高夢 Project」のカリキュラムを説明した後、令和5年度の取組を振り返り、この取組によって得られた資質・能力について検証し、令和6年度以降の展望について紹介する。

2 「アクション型探究」

「アクション型探究」では、生徒一人一人が自身の興味・関心を知る活動を通して、探究したいこと（マイテーマ）に気付き、「わたし」が描きたい未来や地域社会「夢」の実現に向け、「調査アクション」と「解決アクション」を循環させながら（図2.1）、探究（マイ

プロジェクト）を深めていく。「アクションの大きさを気にしたり、失敗を恐れたりせずに、『わたし』がやってみたいことをまずはやってみよう！失敗はOK！大歓迎！そこから学ぼう！」を合言葉にして、粘り強く活動する。この経験を通して、「本校で育てる6つの力」の育成を目指している。なお、「アクション型探究」は、香里ヌヴェール学院中学校・高等学校校長の池田靖章氏に御教授いただいた「アクション探究」を本校に合わせて定義したものである。

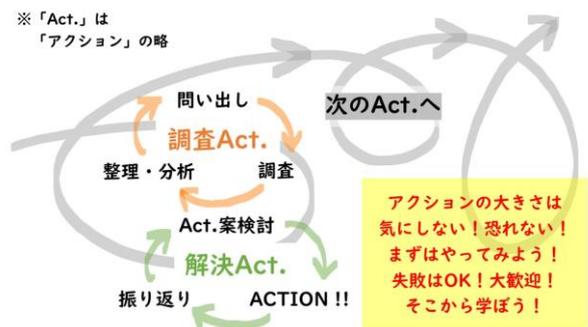


図2.1 「アクション型探究」のイメージ

3 「角高夢 Project」のカリキュラム

「角高夢 Project」のカリキュラムは、令和4年度より更新を繰り返し、令和6年度に全年次分が完成する。1年次は「知る（気付く）」、2年次は「深める」、3年次は「叶える」をキーワードに活動する。1年次4月から5月にかけて、自身の興味や関心「Will」に着目し、身の回りに起こる身近な出来事から「ちょっとした」課題を発見し、その解決に向けて「ちょこっただけ」プロジェクトを立ち上げ、アクションしてみる「ちょこっと夢 Project」（通称「ちょこプロ」）に取り組む。また、1年次6月から10月にかけては、地域社会から求められていること「Need」に着目し、角田市との連携のもと、「角田市第6次長期総合計画」を教材として、他者と協働しながら、地域社会が抱える課題を解決するために「わたし」達ができることを考え、アクションする「地域課題探究」（通称「ちきたん」）に取り組む。そして、これらの経験を踏まえ、1年次11月から最長2年4ヶ月をかけ、「Will」と「Need」

の共通部分を生徒自身が見出し、「わたし」が描きたい未来や地域社会「夢」の実現に向け、「アクション型探究」に取り組む。なお、令和5年度まで、3年次では進路学習が主となっていたが、令和6年度以降は3年次に「進路コース」と「探究コース」の2コースを設置し、生徒自身の「夢」に合わせて選択できるようにした。進路コースを選択した生徒も、進路確定後に探究コースに移行し、卒業までアクションを行う。これにより、3年間を通して、生徒がアクションを継続できる環境を整えた。



図 3.1 「角高夢Project」カリキュラムの概要

4 令和5年度の実践

令和5年度は、1年次及び2年次が新カリキュラムでの実施となった。本節では、2年次の取組を振り返る。4.1で年次全体の取組、4.2で生徒が実際にアクションした内容について紹介する。

4.1 年次全体の取組

4.1.1 「わたしと社会トークセッション」

「角高夢Project」のオリエンテーションでは、「常に『わたし』から湧き出る興味や関心を大切に、どんどんアクションしよう。それを『わたし』を起点に、身近（地域社会）、宮城、日本、そして世界に繋げていこう。」と伝えている（図 4.1）。そのきっかけ作りとして、『わたし』を起点に地域・社会と繋がる』を合言葉に、角田市、認定NPO法人カタリバ、本校生徒によるトークセッションを実施した。

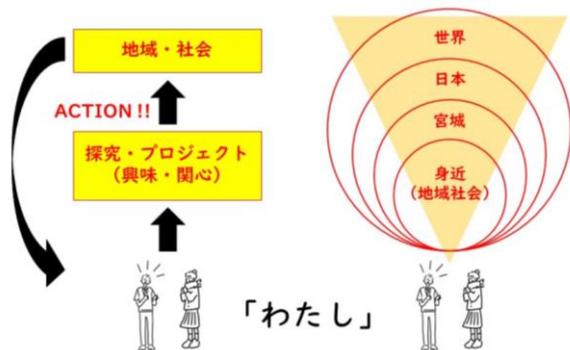


図 4.1 オリエンテーション時のスライド

4.1.2 「角田市ヒューマンライブラリー」

平成30年に告示された高等学校学習指導要領「総合的な探究の時間」の目標には、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成する」との記載がある。そこで本校では、角田市生涯学習課と連携し、角田というフィールドで、自身の「夢」を追い求め、活動を継続している大人達をゲスト（令和5年度は10名）に迎え、生徒と対話していただく「角田市ヒューマンライブラリー」を開催した。地域や社会の課題解決に向けて活動している方々や多様な働き方・生き方をしている方々の話を聴くことを通して、生徒は多様な在り方・生き方について知ることができた。また、多様な生き方をしている方々と実際にコミュニケーションを取ることを通して、生徒自身のマイテーマや自身の生き方について向き合うきっかけとなった。

4.1.3 「角高探究アクティブlab.」

角田市生涯学習課と認定NPO法人カタリバが主催し、授業外での探究支援として、夏季休業と冬季休業に本校生徒を対象に、探究相談会「角高探究アクティブlab.」を開催した。生徒が授業だけでなく長期休業期間も利用して探究を深めるきっかけとなった。なお、角田市生涯学習課の職員1名と認定NPO法人カタリバの職員1名は、本校の学校運営協議会委員であり、「角高夢Project」を中心に地域連携のコーディネーター役を担っている。

4.1.4 校外研究

本校では、生徒が課題解決に向けて、自らアポイントメントをとり、対面やオンラインなど様々な形式でインタビュー等を実施する「校外研究」の日を設けている。この校外研究により、文献調査だけでは得られない、それぞれの分野の専門家から深い知識を得ることができ、生徒の探究活動が社会的背景や学術的背景をもとに深まった。

4.1.5 各種発表会・コンテストへの参加

本校では、校内において、探究発表会を秋と冬に開催している。この発表会では、本校生徒だけでなく、他校の生徒にも対面やオンラインで発表してもらっている。また、角田市長、角田市教育長、大学教員、保護者、地域住民等にも参観してもらうことで、生徒に多角的・多面的な視点から刺激を与えることができた。そして、令和5年度は、仙台第三高等学校や白石高等学校の発表会、全国高校生マイプロジェクトアワード

2023 宮城県 Summit、COOP トリプルカードみやぎスマイル基金活動発表会、かく大學 2023 最終報告会等で、延べ 34 名が校外で発表を行った。

4.2 生徒の主なアクション

4.2.1 「高校生と一緒に学ぼう会」

教師を志す生徒が、角田市内の小学校第 6 学年を対象に学習会を開催した。マイテーマは「『わからない』をなくす授業とは」、描きたい未来や社会は「将来自分が一人でも多くの生徒の疑問を解決し、学習が楽しいと思ってもらえる未来」である。生徒自身が企画書を作成し、角田市教育委員会に提案し、角田市内の小学校を訪問し周知した。本校に小学生を招待し、算数の質問会や授業を実施した。

4.2.2 「ノンアレレグドーナツを作ろう」

角田市内の菓子店のアドバイスを受け、ノンアレレグドーナツを開発した。マイテーマは「食物アレルギーの人でも制限なく食事をする為にはどうすればよいか」、描きたい未来や社会は「食物アレルギーの人でも食物アレルギーを持っていない人と同じ食事を摂ることができる未来」である。何度も試作し、改良を重ねた。マイプロジェクトアワードでは、「地域 Summit 特別賞」を受賞した。

4.2.3 「ポジティブ変換 LIFE !」

「生活の中でネガティブなことが起きた時に、このカレンダーを見て、ポジティブになって欲しい」との願いを込めて、「ポジティブ日めくりカレンダー」(図 4.2)を作成した。マイテーマは「人間の不安を減らすためにはどうしたら良いか」、描きたい未来や社会は「不安を持つ人が一人でも減り、生活しやすい環境がある未来」である。作成したカレンダーは、角田市内の 5 カ所に設置した。



図 4.2 生徒が作成したカレンダー

5 得られた資質・能力の検証

本節では、令和 5 年度 1 年次及び 2 年次生徒を対象とした「本校で育てる 6 つの力」に対する過去 (令和 5 年 4 月時点) から現在 (令和 6 年 2 月時点) までの自己成長や自己変容を測る年度末自己評価 (令和 6 年 2 月実施、1 年次 : n=146、2 年次 : n=106)、認定 NP0 法人カタリバによる令和 4 年度入学生を対象とした

「地域社会への興味・関心」「主体性」「協働性」を測る自己評価アンケート (令和 5 年 3 月と令和 6 年 2 月にそれぞれ同様の項目で実施、令和 5 年 3 月 : n=105、令和 6 年 2 月 : n=111、以下「カタリバアンケート」と呼ぶ) の結果を考察する。

5.1 結果

5.1.1 年度末自己評価について

過去 (令和 5 年 4 月時点) の自分と現在 (令和 6 年 2 月時点) の自分について質問し、5 点満点で評価させた。その質問と結果 (平均値) が、図 5.1 である。



図 5.1 年度末自己評価の質問と結果

5.1.2 カタリバアンケートについて

カタリバアンケートは、「地域社会への興味・関心 (6 項目)」「主体性 (3 項目)」「協働性 (3 項目)」について行い、それぞれの項目に対して「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「思わない」の 4 段階で回答させた。本論文では、特に取り上げたい 6 項目について、質問と結果を以下にまとめる。なお、結果については、ポジティブ回答 (「とてもそう思う」と「そう思う」の合計) の割合を用いる。

—地域社会への興味・関心

質問 3 地域や社会に対して気になることがある。

結果 R5 47.6% R6 67.6% (20.0 ポイント向上)

質問 6 自分の行動で、地域や社会を変えられると思う。

結果 R5 41.9% R6 67.5% (25.6 ポイント向上)

—主体性

質問 7 うまくいくか分からないことにも、失敗を

恐れずに取り組むことができる。

結果 R5 52.4% R6 70.2% (17.8ポイント向上)

質問8 自分の将来は自分で切り開けると思う。

結果 R5 67.6% R6 83.8% (16.2ポイント向上)

一協働性

質問10 学校内の友人や先生と積極的に話し合うことができる。

結果 R5 67.6% R6 76.5% (8.9ポイント向上)

質問11 年齢が異なる人や学外の人などに意見を伝えたり、話し合ったりすることができる。

結果 R5 58.1% R6 68.4% (10.3ポイント向上)

5.2 考察

5.2.1 年度末自己評価について

「本校で育てる6つの力」のすべての項目で成長があったと回答している。特に大きな変化が見られたのは、「志す力」「伝える力」「創る力」であり、いずれも0.6ポイント以上の向上となった。「志す力」について、「角高夢 Project」の活動によって、自身の探究に誇りを持ち、自分事として主体的に活動できるようになったことが読み取れる。また、「伝える力」について、授業内での対話や各種発表会・コンテストへの参加を経験することにより、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が身についたと感じていることが読み取れる。さらに、「創る力」について、「わたし」を起点として、「わたし」が描きたい未来や地域社会「夢」の実現に向けて取り組めるようになった生徒が増加してきていることが読み取れる。一方で、「挑む力」や「認める力」は大きな向上は見られず、未だ保守的な生徒が多く存在していることが課題であることがわかる。

5.2.2 カタリバアンケートについて

カタリバアンケートについても、質問した12項目すべてにおいてポジティブな回答が増加している。特に、地域社会への興味・関心については、質問6の結果が25.6ポイントの向上となり、「角高夢 Project」を中心とした地域との関わりの中で、地域社会に貢献できた成功体験から自己有用感を獲得している生徒が増加してきていることが読み取れる。しかしながら、他の項目と比較すると、この項目のポジティブ回答の割合は最も低く、年度末自己評価においても「挑む力」の結果が低かったことから、今後も継続的に対策していく必要がある。また、協働性については、質問11のポジティブ回答の割合及び向上ポイントがいずれも低く、

同年齢の人々とのコミュニケーションは取れる（質問10の結果より）が、異年齢の人々とのコミュニケーションに苦手意識を感じている生徒が多いことが読み取れる。年度末自己評価においても「認める力」の結果が低かったことから、今後さらに校外の人々と関わる機会を増やしていく必要がある。

6 今後の展望（令和6年度以降の取組について）

本校は、令和6年度に文部科学省より「高等学校DX加速化推進事業（DX ハイスクール）」に採択された。「STEAM Lab.」を校内に開設し、ハイスペック PC や3Dプリンター等のハード面と、UnityやBlender等のソフト面の両面を整備できるようになった。これにより、生徒の多様な興味や関心にこれまで以上に対応できる。生徒のアクションをより推進し、「挑む力」の向上につなげたいと考える。なお、「STEAM Lab.」は、本校生徒のみならず、地域の小中学生や一般の方々にも開放する。生徒が異年齢の人々と関わる中で、「関わる力」や「認める力」を育成していきたいと考えている。また、同じく令和6年度より、福島学院大学マネジメント学部及び東北福祉大学と高大連携協定を締結し、本校の探究活動や発表会への指導助言等に御支援いただけたことになった。さらに、令和6年度は県外の大学やオンラインでの発表への参加を検討している。校外で発表する機会を多く設けることで、様々な方の意見を聞くことができ、幅広い視野を身につけ「認める力」の向上を図ることが可能となると考える。加えて本校は、生徒も教職員も積極的に外に出ることを大切にし、外部の先進的な取組に触れることや、外部の人々との対話や議論を重ねることにより、新たな発見や驚きに出会い、探究が深まることを目指している。特に、地域連携についてはさらに加速させたい。角田市とのさらなる連携のもと、角田市商工会、地域振興公社、農業振興公社、地元企業等との連携強化を目指す。本校は、今後も地域と連携した「アクション型探究」を推進し、「わたし」が描きたい未来や地域社会「夢」の実現に向け、探究的な学びを中心とした教育活動をさらに大きく展開していきたい。

参考文献

- [1] 文部科学省 (2018) . 「高等学校学習指導要領 (平成30年告示)」, 475-477.
- [2] 認定特定非営利活動法人カタリバ (2024) . 「令和5年度 角田市高校生地域探究活動支援業務 成果報告書」, 5-6. 執筆責任者 教諭 熊谷 正太